

別府溝部学園短期大学自己点検・評価について —平成21年度—

大石 博 嗣

The Report of the 2009 Self-Study and Evaluation at Beppu Mizobe Gakuen College

Hiroshi Oishi

はじめに

現在、大学は全入時代を迎え、幅の広い学生層を受け入れるようになっていく。向学心・向上心が強く、自らの可能性の発掘、伸長をめざして入学してくる者が多数を占めてはいるが、目的意識も定かではなく、とりあえず、何となく入学してきている者も少数ではあるが存在するのも事実である。

このような中、大学に問われているのが、「教育の質」であり、高等教育機関としての質を確保しつつ、多様な学生のニーズに応え得る教育を創造し、提供しなければならない。特に、教育の中核となる授業については、教員が最も意を持ちいなければならない部分である。中央教育審議会でも、教員が授業内容・方法を改善し、向上させることの必要性を指摘しており、学生の学力や意識、受講態度、理解力等を的確に把握して適切な授業を展開しなければならないことはいうまでもない。そして、何事も事業を実施した場合、その過程や結果について分析、評価することが肝要である。いわゆる、PDCAの取り組みの強化を図らなければならない。

授業の評価、分析は、従来、教員の自主的・主体的な活動にゆだねられてきたが、評価の高い客観性や的確性を求め、教員の自己評価に加え学生による評価も重視しなければならない。

本学では、平成5年度から委員会を発足させて、学内の自己点検・評価について検討を重ねてきた。12年度からは、全教科を対象に授業評価が開始されて現在に至っており、その結果を基に授業の改善・工夫の努力が行われ、学生生活をより有意義なものにしている。

1. 調査内容及び手続き

平成21年度の「学生による授業評価」は、「デジタルキャンパス」を利用したシステムでの評価法により、下記の10項目の評価項目について実施した(表1)。

表1 学生による点検項目

- | | |
|------|-------------------|
| Q 1 | この授業はわかりやすかった |
| Q 2 | 学習内容に興味や関心が持てた |
| Q 3 | 学習内容の分量は適切だった |
| Q 4 | 教員の教え方に工夫が感じられた |
| Q 5 | 教員は熱心に教えていた |
| Q 6 | 授業中どの学生にも公平に接していた |
| Q 7 | いつも集中して聴けた |
| Q 8 | 私語をつつしんだ |
| Q 9 | 遅刻、欠席がないよう心がけた |
| Q 10 | 意欲的に取り組んだ |

表2 教員による自己評価

- | | |
|------|--------------------------|
| Q 1 | 学生は授業を理解した |
| Q 2 | 授業の事前準備は、十分おこなった |
| Q 3 | 声の大きさ、話し方に留意した |
| Q 4 | 学生の興味・関心を喚起するように心がけた |
| Q 5 | 各種教材(視聴覚機器・教科書等)を有効に活用した |
| Q 6 | 授業の開始・終了時刻を守った |
| Q 7 | 授業中どの学生にも公平に接した |
| Q 8 | 出欠確認を適切におこなった |
| Q 9 | 授業目的を達成した |
| Q 10 | 授業要項(シラバス)の記載内容は現状でよい |
| Q 11 | 学生のことが理解できた |

教員による自己評価も従来通り下記の11項目で行った(表2)。

2. 平成21年度授業評価

【全体評価】

表1の評価項目を、次の5段階で評価した。

1 とてもそう思う	肯定的評価
2 だいたいそう思う	
3 どちらとも言えない	
4 あまりそう思わない	否定的評価
5 まったくそう思わない	

・前期

学生の授業評価(対教員及び自己)は、全体の平均の数値から見ると、全学科とも肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)が、Q7(いつも集中して聴けた)以外の項目について80%を超える高い結果が出ている。昨年度の評価結果では、すべての項目が80%以上であったことを考えると少し残念であるが、Q7とて79%であることを考えると例年並みの結果である。

特に、Q5(教員は熱心に教えていた)が91%、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)が89%の高率であり、教員の授業に臨む姿勢・努力が好意的に受けとめられている証であり喜ばしいことである。教員が、日々、学生の実態を的確に把握し、学生のニーズに合った、そして、学生の将来を見据えた授業創造に積極的に取り組んできた結果であろう。教員は、「授業で勝負する」と古くから言われてきた。大学は、「研究」を重要な活動分野としてきたが、近年は「教育」活動の重視が言われ始め、特に授業改善のためのFD活動の活発化が期待されている。学内において、組織的、系統的な活動は表面だっでは見られないのは残念であるが、教員一人ひとりが課題意識を持って努力していることが推測される。

また、学生自身については、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)が88%、Q10(意欲的に取り組んだ)が85%となっており、授業にかける熱意が感じられ、教員の姿勢との間で相乗効果が出ていると思われる。そして、Q7が79%ということは、学生も冷静な自己評価の現れで、今後の真摯な取り組みが期待できると推測する。

ただ、学科間で見ると、ライフデザイン総合学科ではすべての項目が85%以上であり、90%を超える項目も4項目にも及んでいる。反面、70%台の項目が、介護福祉学科の6項目、食物栄養学科の5項目と、2学科が他と比較すると多く、学科間落差の存在は気になるところであり、项目的に見て、授業内容が十分理解されないまま進行している危険性を感じる。

一方、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)は、昨年度と同じく10%を超える項目は0項目で、5%以下が3項目(Q5、6、9)であったことは、授業評価の趣旨が生かされた結果であると考ええる。

ただ、食物栄養学科では、10%を超える項目が3項目あり(Q1・2・4)、理系的な学習内容及び実習の比重が高いことが影響しているのであろうか。大学は高等教育機関として、授業の難易度が上がることは当然であるが、それをいかに分かりやすく教えるか、学生の実情を正しく理解し、個に応じた、効率的・効果的な授業の管理、運営に努力を惜しんではならないと考える。教員が相互に連携を図りつつ、一人の落伍者もださない、魅力ある授業の創造、開かれた授業等々に向け叡智を結集することが重要である。

学生の授業への取り組む姿勢についても、学生の問題であると放置するのではなく、一人一人を大切に、学習指導から生活指導にわたり親身になった対応をすることを常に忘れてはならない。確かに、全体的には肯定的評価が例年になく高く、満足度の高い授業が提供されていると考えられるが、否定的評価の学生に対しても正当性・妥当性のある内容であれば十分検討して、期待に応える改善された授業を提供することが、本学の教育の基本に沿うことになる。

・後期

後期は、全体の平均から見て、肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)について、80%以上の評価をしているのが8項目となっている。前期に比べ1項目の減ではあるが、意義ある授業が実施され、充実した時間を過ごしていることが推察される。

ただ、後期になると、学生には慣れとダレが生じたためか、肯定的評価の平均値が前期に比して

表3 全体評価

前期

	1 + 2 [肯定的評価]					3					4 + 5 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	85%	77%	81%	78%	80%	7%	11%	12%	11%	10%	8%	12%	7%	9%	9%
Q 2	86%	75%	83%	78%	80%	8%	14%	11%	14%	12%	6%	10%	6%	7%	8%
Q 3	86%	78%	79%	79%	80%	8%	14%	15%	13%	12%	5%	8%	6%	8%	8%
Q 4	87%	77%	84%	86%	84%	7%	12%	10%	9%	9%	6%	10%	5%	5%	7%
Q 5	93%	87%	90%	94%	91%	4%	8%	6%	4%	6%	2%	4%	2%	0%	3%
Q 6	91%	86%	90%	91%	89%	5%	7%	7%	8%	7%	3%	6%	3%	0%	4%
Q 7	85%	77%	80%	76%	79%	8%	14%	14%	16%	13%	7%	8%	6%	8%	8%
Q 8	85%	84%	83%	79%	83%	7%	10%	12%	15%	11%	7%	5%	4%	6%	7%
Q 9	92%	92%	89%	79%	88%	4%	5%	8%	5%	6%	3%	2%	3%	6%	4%
Q10	91%	81%	86%	81%	85%	5%	13%	10%	15%	11%	3%	5%	4%	4%	6%

後期

	1 + 2 [肯定的評価]					3					4 + 5 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	79%	79%	82%	77%	79%	10%	14%	13%	10%	12%	11%	7%	5%	12%	9%
Q 2	78%	81%	83%	77%	80%	12%	12%	12%	13%	12%	9%	6%	5%	10%	8%
Q 3	81%	85%	83%	83%	83%	11%	11%	13%	8%	10%	7%	4%	4%	8%	7%
Q 4	80%	83%	84%	83%	82%	11%	11%	10%	8%	10%	9%	6%	5%	9%	8%
Q 5	88%	89%	92%	87%	89%	7%	6%	5%	6%	6%	4%	4%	2%	4%	4%
Q 6	87%	90%	89%	85%	88%	7%	6%	9%	7%	8%	4%	3%	2%	5%	4%
Q 7	78%	81%	81%	76%	79%	13%	13%	15%	11%	13%	9%	5%	4%	9%	8%
Q 8	79%	82%	82%	79%	81%	12%	11%	13%	10%	11%	8%	6%	4%	7%	7%
Q 9	91%	90%	89%	79%	87%	5%	7%	8%	7%	7%	3%	2%	3%	7%	4%
Q10	86%	85%	83%	78%	83%	9%	11%	13%	12%	11%	5%	3%	4%	7%	6%

低下した項目が7項目にも渡っているのは問題であろう。教員の熱心な指導態度に学生の共鳴度は一段と増し、活力ある授業が教員、学生双方の真摯な態度により推進され、前期よりも評価が上昇するのが近年の特色とするところであったが、今年度の結果は誠に残念な姿である。

教える立場の教員は、今一度、自らの授業を冷静に見つめ直し、学生の実態に即したものになっているか、学習者を中心に据えた授業になっているか等、シビアな分析を行い、真摯な態度で授業改善に取り組むことが必要であろう。

学生自身も、「自立・自活できる」自己実現に向けて努力しているか、エネルギーのすべてを授業に集中しているか真正面から自己評価しなければ

ならない。甘えの構造に迷い込むことなく、学生としての自覚をもち、謙虚な態度で授業に取り組んでもらいたい。予習、復習を怠ると、授業の理解は難しくなり、未消化のまま日時を重ねると無味乾燥な学生生活をおくることにもなる。辛くとも、プロセスの積み重ねなくして夢の実現は期待できない。

学科別では、全体的に評価が低下した傾向にある中で、食物栄養学科では上昇傾向が見られる。前期、肯定的評価について70%台が5項目あったが1項目へと減少し、わずかに1項目であった90%台は2項目へ、80%台は4項目から7項目へと増加している。

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそ

う思わない)も、10%台が3項目から0項目に減少し、授業改善が確実に行われたものと推察される。

逆に、ライフデザイン総合学科は、90%台が4項目から1項目へ、70%台は0項目から4項目へと好ましくない傾向が見られる。ファッションショーや卒業制作展の作品製作と就職活動の重なりによるプレッシャーからきているのであろうか、学科内での多面的、多角的な検討を期待したい。

残りの2つの学科のうち、前期にすべての項目が80%であった幼児教育学科は、後期でもその水準は持続されている。介護福祉学科では、肯定的評価について70%台が前・後期とも6項目に及んでおり、幅は小さいが低下している項目が見られることは若干気になるところである。

全体的には、今年度も肯定的評価が高く、否定的評価は低くなっているが、授業指導者のめざすところは、一人の不平・不満学生を出さない授業実践でなければならない。「一人の学生の自己実現が図れなくて、他の学生の自己実現が図れるはずがない」を基本に、一人ひとりの学生を正しく理解し、創意工夫に溢れた、魅力ある授業の創造に努力すべきであろう。その際、個人として授業研究を行うことはもちろん重要であるが、学科やグループ等で組織的に研究活動を行い、PDCAの継続的取り組みが大切であると考えます。

そして、「どちらとも言えない」の項目の数値が低いことは、学生がまじめに本評価に取り組んでいる証であり、信頼性を示すものと言える。以下、学科・学年ごとに考察を加えることにする。ただし、中国からの留学生については、学科の枠を取り払って学年単位でまとめて集計している。

【学科別評価】

1. ライフデザイン総合学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)では82%もの学生が「とてもそう思う」と答え、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると91%の最高値となっている。Q8(私語をつつしんだ)とQ10(意欲的に取り組んだ)でも、肯定的評価がそれぞれ81%と86%となっており、学生の授業に臨む姿勢・態度は是とすところである。

教員に関する項目に関して、肯定的評価では、Q5(教員は熱心に教えていた)では70%が「とてもそう思う」と答え、肯定的評価になると89%と大変高い評価となっている。Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)についても、肯定的評価は87%と大変高く、学生の意欲と教員の熱意がとてもよくかみあっていることを示している。

一方、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)では、Q1(この授業はわかりやすかった)、Q2(学習内容に興味や関心を持てた)、Q7(いつも集中して聴けた)がいずれも11%であり、教える側の要求水準と学ぶ側の期待水準に乖離が見られる。大学教育の水準を確保しつつ、Q8~10に見られた比較的高い学生の意欲を損なわないよう、学生の側に立った授業の在り方について検討しなければならない。学生自身も、予習、復習など学習時間を十分確保して、指導者の期待に応え得る姿勢を確立しなければならない。

表4 ライフデザイン総合学科1年(前期)

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思 う だ い た い そ う	言 え な い	ど ち ら も 思 わ な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ま つ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q1 この授業はわかりやすかった	53%	24%	11%	6%	5%	0%	100%
Q2 学習内容に興味や関心を持てた	52%	23%	14%	7%	4%	0%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	57%	21%	15%	4%	3%	0%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	25%	13%	5%	3%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	70%	19%	8%	1%	1%	1%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	67%	20%	8%	3%	1%	1%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	48%	27%	13%	8%	3%	1%	100%
Q8 私語をつつしんだ	56%	25%	9%	4%	5%	1%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	82%	9%	5%	1%	2%	0%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	64%	22%	7%	4%	2%	1%	100%

・後期

前期同様に、「とてもそう思う」で70%以上となっているのはQ9で、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも89%の高率を維持している。この項目以外で、肯定的評価が80%以上となっているのはQ5、Q6、Q10の3項目である。教員

の授業に対する指導姿勢と学生の学ぼうとする姿勢が共鳴している姿が伺える。

しかし、前期、「とてもそう思う」で最高の82%であったQ9が73%へと低下したのをはじめ、すべての項目が低下している。特に、Q1では53%から41%へ、Q8では56%から43%へと10ポイント以上の大幅な低下が見られる。

肯定的評価でみても、Q2とQ7は70%を割る評価であり、学習内容の難易度が上昇した影響なのだろうか。消化不良を起こす学生が増えるとともに、授業態度も後ろ向きになりつつあるのではないかと危険性を感じる。

否定的評価でみても、10%を超える項目が前期の3項目(Q1・2・7)から5項目(Q1・2・4・7・8)へと増加している。このことは、授業に対する不満が授業態度の後退となって現れているとも推測され、次年度に向けての大きな課題である。

表5 ライフデザイン学科1年(後期)

学生による授業の自己点検	思う とても そう	思 う だ い た い そ う	言 え な い	ど ち ら か も	あ ま り な い	思 わ な い	ま っ た く そ う	無 回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	41%	31%	16%	9%	3%	0%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	43%	26%	18%	9%	3%	0%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	49%	27%	16%	6%	2%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	46%	27%	16%	7%	3%	0%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	61%	24%	11%	3%	1%	1%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	62%	22%	10%	3%	1%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	42%	26%	19%	8%	4%	1%	100%		
Q8 私語をつつしんだ	43%	28%	19%	6%	4%	1%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	73%	16%	7%	2%	2%	0%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	56%	25%	13%	5%	1%	0%	100%		

2. ライフデザイン総合学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関してQ5(教員は熱心に教えていた)が75%、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)が71%となっている。特にQ5は、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると91%の最高値となって

いる。その他の項目も、肯定的評価ではいずれも80%の大半をキープしており、指導者の熱心な態度や創意工夫された授業に学生が的確に反応し、活力ある授業が展開されていることが推察される。

Q7(いつも集中して聴けた)では、「とてもそう思う」に関して57%と若干厳しい評価がみられるが、肯定的評価の段階では82%と他と遜色ない結果となっている。1年前の同期でも同じような結果がみられており、年月が経ても好ましい姿が持続されていることは喜ばしい限りである。

ただ、Q1(この授業はわかりやすかった)で、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)が10%となっており、授業内容に戸惑いを見せている学生がいることを見過ごしてはならないだろう。一人一人を大切に、きめ細かいサービスを提供する本学の特色を授業運営の中でも発揮していかなければならない。熱心な指導態度は高く評価されているのだから、分かりやすい授業の工夫、改善に積極的に取り組み、魅力ある授業の創造に努めて欲しいものである。

表6 ライフデザイン総合学科2年(前期)

学生による授業の自己点検	思う とても そう	思 う だ い た い そ う	言 え な い	ど ち ら か も	あ ま り な い	思 わ な い	ま っ た く そ う	無 回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	61%	20%	8%	5%	5%	0%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	66%	21%	7%	2%	4%	0%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	65%	19%	7%	5%	3%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	66%	18%	7%	5%	3%	0%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	75%	16%	3%	3%	2%	1%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	71%	15%	7%	4%	2%	0%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	57%	25%	10%	4%	3%	1%	100%		
Q8 私語をつつしんだ	61%	20%	11%	6%	2%	0%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	68%	15%	8%	6%	2%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	68%	20%	8%	2%	2%	0%	100%		

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して70%を超える項目は1つもなくなったが、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では3項目が80%以上となっている。Q9(遅刻、欠席が

ないよう心がけた)が87%、Q10(意欲的に取り組んだ)が81%、Q5が80%の各項目で、残りの項目も殆どが70%台をキープしている。学生は欠席・遅刻をしないよう努力し、意欲的に授業に参画しようとしており、教員の指導姿勢も高い次元で確保されているので、今後の成長に繋がるものとして期待したい。

しかし、「とてもそう思う」に関してみまると、すべての項目で大きく低下していることは看過できない。なかでも、前期に比して10ポイント以上低下した項目が6項目(Q1・2・3・4・5・6)もあることは重大である。その結果、当然のこととして、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)では、かなり厳しい評価がみられる。「まったくそう思わない」のみでも、Q1が13%、Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)が10%となっている。「あまりそう思わない」を含めた段階では7項目(Q1・2・3・4・6・7・8)が10%以上である。特に、Q1は、21%と近年にない厳しい評価である。

1年次生と同様に、低下傾向がみられることは要注意であり、また、昨年度の1年次後期ではすべての項目で肯定的評価が80%以上の好結果が出ていたことを考えると、多面的、多角的な検討が必要であろう。

表7 ライフデザイン総合学科2年(後期)

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思 う だ い たい そ う	言 え な い ど ち ら も	思 わ な い あ ま り そ う	思 わ な い ま っ た く そ う	無 回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	48%	21%	11%	8%	13%	0%	100%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	50%	22%	13%	7%	8%	1%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	50%	21%	12%	8%	9%	0%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	48%	21%	14%	8%	10%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	62%	18%	10%	5%	4%	0%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	57%	21%	10%	7%	5%	1%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	48%	25%	15%	6%	6%	0%	100%
Q8 私語をつつしんだ	56%	21%	10%	8%	3%	1%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	21%	10%	2%	1%	0%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	59%	22%	12%	4%	3%	0%	100%

3. 食物栄養学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)が、「とてもそう思う」で88%の極めて高い評価を示し、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では96%の最高値となっている。この他に、肯定的評価が80%以上になっている項目は、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)88%、Q5(教員は熱心に教えていた)87%、Q8(私語をつつしんだ)84%、Q10(意欲的に取り組んだ)83%である。学生は、授業に臨む教員の熱心な姿勢を好意的に捉え、誠実に授業を受けようとしている姿勢が伺え、教員と学生との円満な関係が維持されていることが推察される。

肯定的評価では、前述の5項目以外の項目すべてが70%台ではあるが、学生側に関する項目はQ7(いつも集中して聴けた)のみで、他はすべて教員側に関する項目である。特に、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)でみると、Q1(この授業はわかりやすかった)15%、Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)13%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)12%となっていることは、他ではあまり見られない姿である。授業や教員に対する不満は、Q7(いつも集中して聴けた)12%に影響を与えているとも

表8 食物栄養学科1年(前期)

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思 う だ い たい そ う	言 え な い ど ち ら も	思 わ な い あ ま り そ う	思 わ な い ま っ た く そ う	無 回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	48%	26%	11%	8%	7%	0%	100%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	46%	28%	13%	7%	5%	0%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	52%	26%	14%	4%	4%	0%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	49%	27%	11%	8%	5%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	63%	24%	9%	2%	2%	0%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	63%	25%	4%	3%	4%	1%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	49%	28%	11%	6%	6%	1%	100%
Q8 私語をつつしんだ	66%	18%	9%	3%	3%	0%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	88%	8%	3%	1%	0%	0%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	63%	20%	10%	4%	2%	0%	100%

考えられ、課題を残す評価となっている。

学生の実態を的確に把握し、Q10の肯定的評価83%を損なうことなく、学習者を主体にした授業創造に叡智を結集しなければならない。教える側の到達目標値を適正に設置し、興味、関心が沸き、分かりやすい授業をどのように創造していくべきか、授業改善に向けた組織的な取り組みを期待したい。また、学生も主体的に授業に参画し、予習、復習を怠ることなく、自己研鑽に励まなければならないことはいふまでもない。

・後期

やや厳しい評価が出た前期であったが、後期は全体的に改善された結果がみられる。Q9は、前期よりポイントを下げたとはいえ「とてもそう思う」に関しては依然として82%の高い水準を維持している。

「とてもそう思う」について前期よりポイントをアップさせた項目は、5項目(Q3・4・5・6・7)である。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、Q3・4・5・6・7・8・9・10の8項目が80%以上であり、特に、Q9は94%の最高値となっている。80%以上は、前期の5項目からの増加であり、学生生活に馴染み、資格取得等に向けた目的意識も固まり、軸足が授業に置かれている現れではないかと思われる。

表9 食物栄養学科1年(後期)

学生による授業の 自己点検	とても そう 思う	だいた いそう 思う	どちら かとい う	思わ ない	あま り思 わな い	ま った く思 わな い	無 回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	47%	28%	16%	6%	3%	1%	99%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	45%	34%	13%	5%	1%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	57%	27%	12%	3%	1%	0%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	56%	24%	11%	5%	3%	0%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	66%	21%	6%	4%	1%	2%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	66%	25%	6%	2%	1%	1%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	53%	27%	14%	4%	2%	0%	100%	
Q8 私語をつつしんだ	65%	18%	11%	3%	1%	1%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	82%	12%	4%	0%	2%	0%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	63%	24%	8%	3%	0%	1%	100%	

教員の熱心な指導態度に学生が応え、良い雰囲気の中で授業が運営され、学生生活に充実感を与えていると推察される。一人ひとりの人格を尊重しつつ、学生集団が持つパワーを大切にしながら、活力のある授業が一層推進されることを期待したい。

しかし、Q1で、否定的評価が、前期の15%から9%へと改善されたとはいえ注目すべきであろう。高校時代、多くの学生が文系科目中心の学習をしてきたものと思われられるので、理系的素養が要求される本学科の学習には幾ばくかの抵抗を感じているかもしれない。本学科の特質として、その落差を理解して、埋めていく努力、工夫が教員、学生双方に必要である。「9%」からその思いを強く感じるところである。

4. 食物栄養学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して70%以上の高率を示すものはないが、肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)では、Q5(教員は熱心に教えていた)が82%となっている。また、学生に関する項目では、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)が86%となっており、教員の熱心な指導姿勢に学生がまじめに応えようと努力している姿が伺える。

一方、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)では、10%を超える項目が3項目もあることは大きな課題として捉えなければならない。いずれも教員側に関する項目であり、Q1(この授業はわかりやすかった)12%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)10%、Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)10%については、客観的に分析して速やかに改善を図らなければならない。

2年次生になり、専門科目が大幅に増加して、それも馴染み難い理系的科目が増えれば、難易度も上がり、理解がなかなか進まず、興味、関心も減退することもある。しかし、指導者はそれを取り越えて指導しなければならない。学生の実態を的確に捉え、実態に即した創意工夫された授業を構築し、目標水準の達成に努めなければならないと考える。

学生に関しては、遅刻・欠席をしないよう努力

した姿とは反対に、Q 7 (いつも集中して聴けた) で「とてもそう思う」が41%しかなく、あまり例を見ない厳しい評価であり誠に残念な結果である。興味、関心の湧かない学習内容や、わかり難い授業等が影響しているのか、それとも、学生自身の責に属するのか検討が必要である。

表10 食物栄養学科2年(前期)

学生による授業の 自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	47%	27%	15%	6%	6%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	46%	25%	19%	4%	6%	1%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	48%	27%	17%	5%	3%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	50%	23%	17%	5%	5%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	65%	17%	11%	4%	3%	1%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	60%	19%	13%	3%	3%	1%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	41%	31%	21%	4%	4%	1%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	51%	28%	15%	4%	2%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	20%	10%	3%	1%	1%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	49%	29%	16%	3%	2%	1%	100%

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して、70%以上の高水準の評価項目は1つも発生しなかったのは残念である。しかし、前期では5項目(Q 1・2・3・7・10)も存在した50%未満が、いずれも50%台へと上昇し、幅は小さいが改善の跡がみられる。Q 9を除いた9項目は、すべてが評価点を上げており、好ましい方向で授業が進められていることが推察される。

更に、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価での80%台が、前期の2項目(Q 5・9)から後期は4項目(5・6・8・9)へと倍増していることは喜ばしいことである。「とてもそう」に関して、Q 9は前期から評価を下げたとはいえ、肯定的評価では前期とほぼ同値の85%であり、指導者の熱心な態度に伝えようと努力している学生の姿が伺える。

前期に、否定的評価について、10%以上の項目が3項目もあったが、後期はすべてが10%以下と

なっており、授業改善の成果が出たものとする。

しかしながら、改善の傾向があるとはいえ、その到達度は依然としてそれほど高くなく、他の学科に比して決して満足できる状態ではない。指導者の熱心さは引き続いて評価されており、師弟関係は良好な関係であると考えられるので、授業の内容や構成、進め方等は教える側の責任において工夫すべきである。学生の実態を的確に把握し、実態に即した、魅力ある授業の創造に組織的な取り組みが必要であろう。ただ、安易に教える内容を低くすることでわかりやすい授業にすることは避けなければならない。教材・教具を工夫し、教授方法の改善を図ることにより、学生の授業への興味・関心を高め、理解度を深めることが大事である。

表11 食物栄養学科2年(後期)

学生による授業の 自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	52%	22%	18%	3%	5%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	50%	24%	17%	3%	5%	0%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	54%	25%	14%	3%	3%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	56%	23%	15%	2%	4%	0%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	69%	17%	8%	1%	3%	1%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	66%	18%	10%	2%	4%	0%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	50%	24%	19%	4%	2%	1%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	56%	28%	14%	2%	1%	0%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	63%	22%	11%	3%	0%	0%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	57%	22%	17%	3%	1%	0%	100%

5. 幼児教育学科1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q 9 (遅刻、欠席がないよう心がけた) では85%もの学生が「とてもそう思う」と答え、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると96%の最高値となっている。

「とてもそう思う」段階で、Q 3 (学習内容の分量は適切であった) の39%をはじめ、Q 1 (この授業はわかりやすかった) 41%、Q 7 (いつも集中して聴けた) 41%と、かなりの低水準での評

価が見られる。しかし、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、いずれの項目も70%を超えているのは救いである。

肯定的評価で、Q 9 に続いて高い評価を示しているのは、Q 5 (教員は熱心に教えていた) 89%、Q 6 (授業中どの学生にも公平に接していた) 89%、Q 10 (意欲的に取り組んだ) 86%、Q 8 (私語をつつしんだ) 82%、Q 4 (教員の教え方に工夫が感じられた) 80%の5項目が挙げられる。教員及び学生側双方の項目で高い評価点になっているのは、相互の信頼関係が確実に確保されている証であり、本学科の特色とするところであろう。

ただ、Q 1～3の評価から、極一部ではあるが授業が理解できにくく、興味がわかないで苦労している学生の存在が推測される。一人ひとりを大切に、自己実現が成し遂げられる力の育成に更なる努力を傾注することを期待したい。

表12 幼児教育学科1年(前期)

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	思わない まったくそう	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	41%	37%	14%	5%	2%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	48%	30%	14%	5%	2%	1%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	39%	34%	20%	4%	2%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	47%	33%	13%	4%	1%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	64%	25%	8%	1%	0%	2%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	59%	30%	8%	2%	1%	0%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	41%	38%	15%	5%	1%	1%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	58%	24%	13%	2%	3%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	85%	11%	2%	1%	0%	1%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	57%	29%	11%	3%	0%	1%	100%

・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」で70%以上になっているのは、前期に引き続きQ 9 の72%のみであった。そして、前期に比して上昇したのが4項目(Q 4・5・6・7)、逆に低下したのが6項目(Q 1・2・3・8・9・10)で、Q 9 は13ポイントの大幅な低下であった。

肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思

う)では、Q 5 の92%をはじめ、Q 9 が91%、Q 6 が86%、Q 4 が82%、Q 10が81%とでっており、残りの5項目も70%台後半であり、前期に引き続き師弟間の良好な関係が持続されているようである。

否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)でも、5%を超える項目が前期4項目から0項目へと激減しており、満足度の高い状態で学生生活を過ごしているものと思える。

ただ、前期の評価が高すぎた反動なのか、「とてもそう思う」段階で、後期に低下した項目が前述した通り6項目もあったことは問題点として捉えなければならない。特に、Q 1とQ 3の2項目は、いずれも38%とかなり厳しい評価となっている。学生の学習意欲や遅刻・欠席をしない心がけ等はかなり高い水準であるので、一人ひとりの学生理解を深め、分かりやすく、興味・関心を喚起する授業の実施に向け、一層の工夫を重ね、学生の熱い期待に応える授業を確立することを期待したい。

表13 幼児教育学科1年(後期)

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	思わない まったくそう	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	38%	38%	18%	4%	1%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	42%	37%	17%	3%	1%	0%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	38%	40%	17%	3%	1%	0%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	49%	33%	13%	4%	0%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	67%	25%	7%	1%	0%	0%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	60%	26%	12%	1%	0%	0%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	43%	34%	19%	3%	0%	1%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	49%	30%	16%	3%	1%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	19%	7%	2%	0%	1%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	51%	30%	17%	2%	0%	0%	100%

6. 幼児教育学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)が80%を超えている項目が9項目も存在し、残り1項目のQ 9 (遅刻、欠席がないよう心がけた)でも79%となっている。

特に、「とてもそう思う」に限定してみても、Q 5（教員は熱心に教えていた）は72%の高い評価となっており、肯定的評価では91%の最高値となっている。そして、Q 6（授業中どの学生にも公平に接していた）も90%の割合に乗っており、指導者の姿勢に絶対的な信頼を寄せていることが推察される。

このような姿は、1年前の評価でもほぼ同様な姿が見られており、1年が経過しても良好な状態が継続されていることは喜ばしいことである。感動を味わうことの多い体験型学習が多いことに加え、教員の熱意ある姿勢を学生が真正面から受け止め、相互の信頼関係が確立されている証でもある。

このような結果から、否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）で10%を超える項目は1つもなく、Q 1（この授業はわかりやすかった）の7%が最も高い数値である。以下、Q 3（学習内容の分量は適切であった）・Q 7（いつも集中して聴けた）・Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）・Q 10（意欲的に取り組んだ）の項目が、いずれも6%となっている。より高い水準をめざし、個に応じたきめ細かいサービス・支援を、更なる創意工夫ある取り組みを期待したい。

表14 幼児教育学科2年（前期）

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思う だいたい そう	どちら とも言 えない	思わ ない そう	あま り思 わな い	ま た く そ う 思 わ な い	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	56%	28%	9%	4%	3%	0%	100%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	63%	23%	8%	2%	3%	0%	100%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	56%	28%	10%	4%	2%	1%	100%	
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	60%	26%	7%	2%	3%	1%	100%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	72%	19%	5%	2%	1%	1%	100%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	69%	21%	6%	1%	2%	1%	100%	
Q 7 いつも集中して聴けた	47%	33%	13%	4%	2%	0%	100%	
Q 8 私語をつつしんだ	52%	32%	11%	2%	2%	1%	100%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	63%	16%	15%	4%	2%	0%	100%	
Q 10 意欲的に取り組んだ	62%	23%	9%	4%	2%	0%	100%	

・後期

改善の必要性が極めて少なかった前期の評価結果であったが、後期は一段と評価を高めている項目が多数みられる。肯定的評価は全項目とも80%を超え、90%台も前期に引き続き2項目となっている。Q 5とQ 6がそれぞれ92%と90%であり、教員の姿勢は好意的に受け止められ、極めて良好な環境の中で授業が運営されていると思われる。

「とてもそう思う」に限定しても、前期72%であったQ 5は75%に、Q 6については69%から70%へと評価を上昇させている。この2項目に続いて、肯定的評価で高い評価を示しているのは、Q 1とQ 3の87%、Q 2の86%、Q 4の85%が挙げられる。前期、後期ともに、本学の範となるような高い評価がでているのは、平素からの組織的な努力、工夫の賜であろう。

一方で、否定的評価に関しては、当然のごとく前期から一段と数値は減少（好転）しており、6～10%の評価を示していた前期の5項目は、後期になると4項目へと減少し、改善された跡が伺える。

このような結果は、昨年の1年次後期でも、更には昨年の2年次生でも同様の姿がみられており、本学科の特色とするところであり、指導力の高さを示すものである。そして、教員の熱意ある姿勢を学生も真正面から受け止め、相互の信頼関

表15 幼児教育学科2年（後期）

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思う だいたい そう	どちら とも言 えない	思わ ない そう	あま り思 わな い	ま た く そ う 思 わ な い	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	58%	29%	8%	3%	3%	0%	100%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	62%	24%	7%	5%	2%	0%	100%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	61%	26%	8%	2%	2%	0%	100%	
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	61%	24%	8%	4%	3%	1%	100%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	75%	17%	4%	2%	1%	1%	100%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	70%	20%	7%	1%	1%	1%	100%	
Q 7 いつも集中して聴けた	54%	30%	11%	3%	2%	0%	100%	
Q 8 私語をつつしんだ	59%	25%	9%	3%	1%	2%	100%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	68%	16%	11%	3%	1%	1%	100%	
Q 10 意欲的に取り組んだ	60%	24%	10%	4%	2%	0%	100%	

係が確保され、良好な師弟関係が維持、発展されていることを示している証である。

7. 介護福祉学科 1年

・前期

調査項目10項目の中で、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）とQ5（教員は熱心に教えていた）の項目で、「とてもそう思う」に関して、それぞれ86%と80%の極めて高い評価がでている。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、それぞれ92%と94%となっている。

そして、「とてもそう思う」段階では69%であったQ6（授業中どの学生にも公平に接していた）も、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると90%の大台となり、教員の授業に対する姿勢には学生は極めて高い評価を与えている。

これらの項目に続いて、肯定的評価の高い項目として、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）が82%、Q10（意欲的に取り組んだ）が81%で、80%以上が計5項目に及んでいる。

また、残りの5項目（Q1・2・3・7・8）も、肯定的評価はいずれも70%台の後半であり、教員の熱意ある姿勢と学生の意欲がうまくかみあった好ましい状況の下で授業が進められていると思われる。

ただ、否定的評価（あまりそう思わない＋まっ

たくそう思わない）に関しては、10%を超える項目が1つ（Q1）あることは看過してはいけない。資格取得のためには、それ相応の授業水準が要求されるが、学生の実態を的確に把握し、個を大切にしたい、分かりやすい授業の創造に向けて更なる叡智の結集を期待したい。

・後期

Q9では、「とてもそう思う」が72%で、前期に引き続き高い水準が維持されている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、85%となっている。これ以外で、肯定的評価の高い項目として、Q5の85%、Q6の82%、Q3（学習内容の分量は適切であった）の81%が注目され、いずれも教員の側に関する項目である。熱心に教える教員の姿勢と工夫された授業に魅力を感じ、時間厳守で授業に臨もうとする真摯な学生の姿が推察される。

ただ、前期の高い評価の反動なのか、後期に評価が低下した項目がかなりみられることは残念である。「とてもそう思う」の段階でみれば、評価が上昇したのは2項目（Q2・3）のみで、残りはすべて低下している。特に、Q5は80%から67%へ、Q9は86%から72%へと10ポイント以上の大幅な低下がみられる。学生に関する項目（Q7・8・9・10）のすべてが低下しており、自省心を

表16 介護福祉学科 1年（前期）

学生による授業の 自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	あまり 思わない	まったく 思わない	無回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	52%	24%	11%	6%	5%	1%	99%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	49%	26%	16%	6%	3%	0%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	51%	26%	14%	7%	1%	0%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	64%	18%	11%	3%	4%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	80%	14%	5%	1%	0%	1%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	69%	21%	10%	0%	0%	0%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	49%	27%	15%	6%	2%	1%	100%
Q8 私語をつつしんだ	59%	20%	15%	4%	2%	1%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	86%	6%	4%	1%	2%	0%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	55%	26%	14%	4%	1%	0%	100%

表17 介護福祉学科 1年（後期）

学生による授業の 自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	あまり 思わない	まったく 思わない	無回 答	
Q1 この授業はわかりやすかった	50%	22%	12%	7%	7%	1%	99%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	53%	21%	15%	6%	6%	0%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	55%	26%	9%	4%	6%	1%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	60%	19%	10%	5%	6%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	67%	18%	6%	2%	3%	4%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	63%	19%	8%	1%	4%	4%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	45%	28%	12%	6%	5%	4%	100%
Q8 私語をつつしんだ	54%	24%	10%	4%	5%	3%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	13%	6%	1%	4%	4%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	54%	21%	14%	3%	5%	3%	100%

發揮して厳しく自己分析を行った結果なのか、それとも慣れに伴うダレが原因なのか、検討が必要であろう。

そして、否定的評価では、Q 1（この授業はわかりやすかった）が14%、Q 2（学習内容に興味や関心が持てた）が12%、Q 4が11%、Q 7（いつも集中して聴けた）が11%、Q 3が10%となっており、10%以上は1つしかなかった前期に比してかなり厳しい評価である。学生の実態を的確に把握して、分かりやすく、興味・関心が喚起される授業改善への取り組みを期待したい。

8. 介護福祉学科2年

・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」では、80%以上が3項目、70%台も3項目と大変高い評価となっている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、90%以上が3項目、80%台が6項目、最も低い項目でも76%と、大変好ましい状況であるといえる。昨年度の1年次の同時期でも同様な結果がみられており、生き生きとした、充実した授業環境が継続されていることが伺える。

肯定的評価の特に高かった項目は、Q 4（教員の教え方に工夫が感じられた）の97%、Q 5（教員は熱心に教えていた）の96%、Q 6（授業中ど

の学生にも公平に接していた）の95%であった。

3項目とも教員の側に関する項目であるが、学生に関する項目（Q 8・9・10）でも遜色のない評価が示されている。教員の創意工夫及び愛情の籠もった指導姿勢と、学生の意欲、実践がうまくかみあっていることを示している。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）に関しては、10%を超える項目は1つもなく、8項目が5%以下である。分かりやすく組み立てられた授業と、熱心な指導に学生は適切に応え、緊張した状態で授業が維持されていることの証であろう。

ただ、無回答の数値が、他に比べてやや大きめの数値がでていることが気かりである。

・後期

前期において高い評価が示されていたが、後期になると一段と評価が上がり、他の学科にはみられないハイレベルの結果がみられる。「とてもそう思う」に限定しても、すべてが80%以上であり、とりわけ、Q 4とQ 5は94%、Q 6は93%、Q 1（この授業はわかりやすかった）は92%、Q 3（学習内容の分量は適切であった）は90%という驚異的な数値である。いずれも教員側の項目であり、創意工夫を凝らし、学生の側に立って、分かりやすい授業の運営に努める等、平素からの熱心な努

表18 介護福祉学科2年（前期）

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	69%	18%	11%	1%	1%	1%	99%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	71%	18%	9%	1%	1%	0%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	71%	13%	7%	5%	1%	3%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	83%	14%	1%	1%	1%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	88%	8%	2%	0%	0%	2%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	85%	10%	1%	0%	0%	3%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	60%	16%	17%	4%	3%	1%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	67%	15%	12%	4%	1%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	78%	8%	9%	3%	0%	2%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	64%	16%	17%	2%	1%	1%	100%

表19 介護福祉学科2年（後期）

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	思う だいたいそう	言えない どちらとも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	92%	4%	2%	1%	1%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	89%	4%	3%	2%	1%	1%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	90%	4%	4%	1%	1%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	94%	2%	3%	0%	1%	0%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	94%	0%	4%	0%	1%	2%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	93%	2%	3%	2%	1%	0%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	84%	5%	6%	2%	1%	2%	100%
Q 8 私語をつつしんだ	82%	6%	10%	0%	2%	2%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	88%	0%	10%	1%	1%	0%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	86%	6%	4%	1%	2%	1%	100%

力の賜であろう。

また、体験型の授業が多い学科の特性が十二分に生かされている証であり、学生の意欲、関心等を最大限に引き出している現れでもあることが推察される。

1年次の昨年度後期では、「とてもそう思う」に関して、Q8（私語をつつしんだ）53%、Q7（いつも集中して聴けた）55%の他の学科に比して若干低い数値であったが、今回はそれぞれ82%と84%へと大幅に改善されており、学生の自己実現が確実に進展しつつあることの証であると信じる。

否定的評価に関しては、すべての項目が1～3%であり、次年度以降もこのような結果が継続されることを期待したい。

9. 留学生1年

・前期

言葉に不安を抱きつつ、夢を追い、学習意欲に燃えてスタートした日本での大学生活だが、かなり満足度の高い学生生活を過ごしているようである。「とてもそう思う」に限定しても、すべての項目が90%以上で、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、90%後半から100%へと上昇している。不自由な会話環境の中でありながら、教員と学生の意思疎通が十二分に出来て、厚い信頼関係の下で授業がなされている証であろう。当

然のこととして、否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）は極めて小さい値となる。

ほとんどの留学生が満足していると考えられるが、文化や価値観等々が大きく異なるので mismatches も生じやすいことに思いを馳せ、日本人学生に対する以上に一人ひとりの留学生理解に注意を払わなければならない。留学生の期待に応え得る、内容の充実した授業を維持するため更なる創意工夫を重ね、日中友好の絆を強めるためにも、全学挙げて努力しなければならない。

・後期

後期も、前期同様に高い評価がすべての項目で見られる。「とてもそう思う」に限定しても、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）をはじめQ9（遅刻、欠席がないよう心がけた）、Q10（意欲的に取り組んだ）の3項目がいずれも100%となっている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると評価点は更に上昇し、Q8（私語をつつしんだ）以外はいずれも98%以上となっている。数値を見る限りにおいては、問題点はないものと思われる。

日本での生活にも馴染み、落ち着いて学習に専念できるようになり、その結果、学習に対する熱い思いが一段と高まったものと思われる。そし

表20 留学生1年（前期）

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	だいたい そう思う	言えない とも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	90%	10%	0%	0%	0%	0%	100%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	92%	8%	0%	0%	0%	0%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	93%	6%	0%	1%	0%	0%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	99%	1%	0%	0%	0%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	99%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	91%	9%	0%	0%	0%	0%	100%
Q8 私語をつつしんだ	84%	15%	0%	0%	1%	1%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	97%	3%	0%	0%	0%	1%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	94%	6%	0%	0%	0%	0%	100%

表21 留学生1年（後期）

学生による授業の自己点検	思う とてもそう	だいたい そう思う	言えない とも	思わない あまりそう	まったく 思わない	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	98%	2%	0%	0%	0%	0%	100%
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	97%	2%	0%	0%	0%	1%	100%
Q3 学習内容の分量は適切だった	98%	1%	0%	0%	0%	1%	100%
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	100%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
Q5 教員は熱心に教えていた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	94%	4%	0%	0%	0%	1%	100%
Q7 いつも集中して聴けた	95%	5%	0%	0%	0%	0%	100%
Q8 私語をつつしんだ	88%	5%	0%	0%	5%	2%	100%
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	100%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	100%	0%	0%	0%	0%	0%	100%

て、熱意ある教員の姿勢が留学生にも浸透し、彼らの意欲とうまくかみあい、理想的な授業が行われていると思われる。進捗が進むに従って、学力差の拡大等様々な課題も発生するかもしれないが、今回のような評価が今後も保持されることを期待したい。

10. 留学生 2 年

・前期

1 年次生同様に、「とてもそう思う」で極めて高い評価点がでている。Q 8（私語をつつしんだ）の86%が最低の評価であり、残りの9項目すべてが90%以上という大変好ましい評価である。教員の熱心な指導や創意工夫された授業に心が揺さぶられ、日本語試験や他大学への進学等目的意識も明確になり、意欲的で充実した学生生活を送っている現れであろう。今後も、このような大変好ましい状況が継続されることを期待したい。

ただ、Q 8（私語をつつしんだ）の項目で、「まったくそう思わない」が6%となっていることを看過してはならないだろう。一人の落伍者も出さない信念で留学生に立ち向かい、きめ細かい支援を組織的に行う必要がある。

表22 留学生 2 年（前期）

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思う だいたい そう	言え ない そう	どちら とも	思わ ない そう	あま り 思 わ な い	ま つ た く そ う	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	92%	3%	2%	1%	2%	0%	0%	100%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	92%	3%	1%	1%	2%	0%	0%	100%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	92%	3%	2%	1%	2%	0%	0%	100%	
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	95%	2%	1%	1%	1%	0%	0%	100%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	94%	2%	0%	1%	1%	1%	1%	100%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	97%	2%	0%	1%	0%	0%	0%	100%	
Q 7 いつも集中して聴けた	94%	3%	0%	2%	0%	1%	1%	100%	
Q 8 私語をつつしんだ	86%	2%	5%	0%	6%	0%	0%	100%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	97%	1%	0%	1%	0%	1%	1%	100%	
Q 10 意欲的に取り組んだ	98%	2%	1%	0%	0%	0%	0%	100%	

・後期

後期になっても、前期同様に高い評価結果が持

続されている。「とてもそう思う」で、前期80%台であったQ 8も98%へと大幅に改善されており、すべての項目が90%以上となった。数値を見る限り、前期に引き続き、特別問題はないものと考ええる。

教員は、分かりやすく、創意工夫された授業の創造と熱心な指導に意を尽くし、学生もそれに応えて自らの姿勢を律し、真剣に授業を受けている様子が伺える。

また、日本語を上達するため、教室の壁面には「中国語の使用禁止」の文字が添付され、授業に集中する環境作りも工夫されている。そして、他大学への入学試験等が目前に迫ったため、学習に専念しなければならなくなった背景も好転の背景にあるであろう。

留学生全員の夢が実現することを祈念する。

表23 留学生 2 年（後期）

学生による授業の 自己点検	思う とても そう	思う だいたい そう	言え ない そう	どちら とも	思わ ない そう	あま り 思 わ な い	ま つ た く そ う	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	98%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	100%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	97%	2%	0%	0%	0%	1%	1%	100%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	98%	1%	0%	0%	0%	1%	1%	100%	
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	99%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	98%	0%	0%	0%	0%	2%	1%	100%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	
Q 7 いつも集中して聴けた	97%	2%	0%	0%	0%	1%	1%	100%	
Q 8 私語をつつしんだ	98%	2%	1%	0%	0%	0%	0%	100%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	97%	2%	0%	0%	0%	2%	1%	100%	
Q 10 意欲的に取り組んだ	98%	1%	0%	0%	0%	1%	1%	100%	

おわりに

本学の建学の精神である「自立・自活できる人材の育成」を達成するためには、教員の資質能力の向上は不可欠である。大学は、学術研究の中心として深く真理を探究し、専門の学芸を教授研究することを本質とするものであり、従来は、研究活動に重心が置かれていた。しかし、少子化が進行し、大学全入時代を迎えた今日、学生の自己実現を図る「教育」の重要性が叫ばれるようになってきた。

教員が授業内容・方法の改善に叡智を絞り、指導力を向上させる組織的な取り組み(FD)が強調されはじめたのも最近のことである。個人の努力を求めつつ、組織的、継続的な努力が期待されている。

本学で、授業評価を始めて9年が経過した。幸いにも、教員及び学生は真摯な態度で反省、分析、対策を立て、実践し、着実にその成果を挙げてきていると信じる。特に、Q5(教員は熱心に教えていた)の項目については、毎年、前・後期とも最上位の肯定的評価となっており、使命感に溢れ、強い教育的愛情をもったきめ細かい指導が殆どの学生に好意的に受け止められていることは喜ばしいことである。

今年度も、アンケート結果からは、例年並みのかなり高い水準の授業評価がみられ、学生も、大部分が教員の指導姿勢や授業に満足していることが推測される。教員にとって、高い評価からは「やる気」が醸成され、より高い次元での授業の創造へと希望も膨らむ。

一方、厳しい評価には少なからずショックを受ける。しかし、冷静に自己評価して改善の道を模索し、学生の期待に応え得る資質能力を身に付けなければならないことはいままでもない。授業公開等FD研修の積極的な活動を推し進めることも、問題点の解決の一方策である。今回のアンケート結果が、明日の明るい途となることを期待する。